

移住者のまち

東川町史のこぼれ話を知ってもらおうと始めたものの、回を重ねるにつれて長く、理屈っぽくなってきたコーヒーブレイクのコーナー。今回は、東川町史第3巻（以下、本書）の対象である1994年度（平成6年度）～2018年度（平成30年度）ごろの時代区分から少し離れて、明治の開拓以前の東川町について考察してみたい。東川町があるこの地は大昔、どんなところだったのか。いつから人が住んでいるのか、といったことについてだ。今回も少々長いがお付き合いいただければ幸いです。

歴史の始まり

東川町に限らず北海道では一般に、明治時代の入植開始を開基の年とする考え方が根深い。過去の東川村史、東川町史第1、第2巻も、最初に道外からの入植者が入った1895年（明治28年）を開基（または開拓）の年とし、アイヌ民族や縄文人など「開基」以前にこの地に住んでいた人々の動向にはあまり注意を払ってこなかった。

しかし国内外から人が集まり、緩やかながら着実な人口増加を実現している近年の東川町を見ると、こうした人口移動は最近始まったことなのではなく、もっと昔から人々は住みやすい場所を求めて移動を繰り返していたのではないだろうか、という疑問が生じる。

そうした視点で当地の歴史をさかのぼってみると、豊かな水や森林、食料となる動植物に恵まれたこの地が気に入って住み着いた人は大昔から大勢おり、長い年月の間、一時的にいなくなることがあっても、また新たな人々が集まって、21世紀の今につながっていることが分かってきた。明治の入植者も現代の移住者も、それまで住んでいた場所よりこの地に可能性を感じて移って来たという点で、同じ系譜にある。

今回のコーヒーブレイクでは想像力も駆使して、東川の歴史の始まりを探ってみたい。本書の冒頭、第1章「ハブル崩壊を越えて」の前書きでも指摘した通り、旭岳のふもとに広がるこの地は古来、本質的に「移住者のまち」なのだ。



大雪山系の山々のふもとに位置する東川の地。豊かな水や森林に恵まれ、大昔から人が住みついできた

幌倉沼遺跡

東川町役場の隣にある郷土館 2 階の展示室。その一角に「幌倉沼の墳墓群」として、縄文時代の土器や石器などが多数展示されている。

1964年(昭和39年)、町内1号北25のポン倉沼川沿いで畑を水田に代える作業をしている最中、土器片などが見つかった。翌65年(昭和40年)に第1次、さらに67年に第2次の発掘調査が行われ(注1)、土器片や石器、玉など数千点もの資料が発掘された。郷土館に展示されているのは、この時の出土資料のごく一部だ。

一帯は共同墓地の跡とみられ、年代は縄文時代晩期から統縄文時代初期にかけてと判断された。今から3千年～2千年ほど前に当たる。

(注1)第1次発掘調査は1964年(昭和39年)10月15日～11月20日、東川町教委と北海道学芸大学旭川分校(当時)、日大旭川女子短大(同)の合同調査として行われた。その後、この場所が大規模圃場整備の対象に決まったため67年(昭和42年)10月7日～10日に、第1次調査から約200m離れた場所で急ぎ第2次発掘調査が行われた。結果は調査報告書「幌倉沼の墳墓」(東川町教委)にまとめられた。



東川町役場そばにある郷土館。2階展示室では幌倉沼遺跡の遺物が展示されている

本稿執筆の2021年(令和3年)時点で、東川町内に埋蔵文化財包蔵地(いわゆる遺跡)は23カ所ある。ただ、本格的な発掘調査が行われたのはこの幌倉沼遺跡と、1968年(昭和43年)の調査でやはり縄文時代晩期の共同墓地跡などが確認された西6号遺跡(西6号北10)の2カ所だけ。残る21カ所は発掘調査ではなく、遺跡分布に関する一般調査と呼ばれる簡易な調査しか行われていない。



幌倉沼遺跡の発掘調査

ヒントは旭山に

簡易調査で済ませた21カ所の中には例えば、幌倉沼遺跡そばのボン倉沼川沿いで、縄文時代中期の特徴を持った土器の破片が見つかっている。縄文時代中期だと幌倉沼遺跡よりさらに2千年ほど古いことになる。しかし簡易な調査しかされていないため、はたして縄文時代中期にこの場所に人が住んでいたのか、それとも後の時代に別の場所からこの土器が持ち込まれたのかなど、細かいことまでは分からない。

だから確かな証拠だけで、東川があるこの地にいつから人が住んでいたのかを判断するなら、縄文時代晩期に当たる今から3千～2千年前というしかない(注2)。

幌倉沼遺跡や西6号遺跡に住んでいた縄文人たちは、もちろん歴史の教科書には出てこない。でもキリストや孔子と同時代に、東川町があるこの地にも精緻な土器を作る技術を発達させ、共同の墓地を設けるなど精神性や社会性にも富んだ人々が住んでいたことは、もっと知られてよい。

実はさらに興味深いことがある。先ほど「確かな証拠だけで、東川があるこの地にいつから人が住んでいたのかを判断するなら、縄文時代晩期に当たる今から3千～2千年前というしかない」と書いたが、もしかしたら3千～2千年前どころか、今から1万年以上前の旧石器時代から、この地を人々が往来していた可能性があることだ。

謎を解くためのヒントは町内ではなく町外に眠っている。その一つが、アザランやペンギン、ホッキョクグマなど生き生きした動物の行動展示で全国的な人気を集める「旭山動物園」(旭川市東旭川町)のすぐそばにある古い遺跡だ。

(注2) 参考までに、今から約2千年前ならイエス・キリストが生まれた西暦0年の前後だし、約2500年前なら中国で儒教の開祖である孔子が、または仏教の開祖であるガウタマ・シッダールタ(のちのブッダ、お釈迦様)が今のネパールで生まれたところに当たる。約3千年前となると紀元前1千年ごろとなり、中国の伝奇小説を基にした人気アニメ「封神演義」の舞台となった古代中国で、殷から周への王朝交代があったころとなる。



幌倉沼遺跡から出土した縄文土器

マンモスがいたころ

旭山動物園がある旭山は標高295m。動物園のほかにもサクラや紅葉の名所として、旭川、東川など近隣の住民に親しまれている。場所は東川町と旭川市の境界に近く、自動車なら東川市街地からほんの15分ほどだ。

その旭山のふもと近く、東川町との市町村境界からわずか300メートルほど旭川側に入ったところに「倉沼2遺跡」という遺跡がある。遺跡といっても標識など目印があるわけでもなく、人家に近い雑木林の中だが、ここでは縄文時代に加えて旧石器時代(注3)の特徴を持った石器などが見つかっている。

(注3) 旧石器時代とは、石を割ったり削ったりして作った石器(打製石器)を道具として用いた時代のこと。世界的には200万年も前から始まるが、北海道にヒトが渡ってきたのは今から3万年あまり前だと推測されているので、それ以降、1万年ほど前に土器を使う縄文時代が始まるまでの2万年間くらいが、北海道の旧石器時代に当たる。



倉沼2遺跡がある旭山動物園そばの雑木林

旧石器時代は氷河期だった。氷河期も比較的温暖な時期と寒冷な時期を繰り返したが、最終氷期と呼ばれる約7万年前から縄文時代が始まる直前までは特に寒かった。地球上の水が大量に凍ったため、海面は今より100m以上も低かった(注4)。

このため北海道は今から7万年前～1万2千年前にかけて、サハリン(樺太)伝いにユーラシア大陸とつながり(注5)、シベリアに生息していたマンモスやヘラジカ、バイソン(野牛)などが渡ってきた。北広島市の約4万5千年前の地層からはマンモスと、マンモスより早い時代から北海道にいたナウマンゾウの化石と一緒に発掘されている。

北海道にヒトが渡ってきたのは、こうした最終氷期の最中だ。シベリアのあまりの寒さから逃れるため、マンモスなど大型動物を追うように陸続きだったサハリン経由でヒトも南下したと考えられている。氷河期の一時期、北海道は今のインドやアフリカのようにゾウや野牛などが群れをなして、旧石器時代の北海道人たちはこれらの大型動物を狩猟して暮らしていたのかもしれない。

東川や旭川周辺でマンモスの化石は発掘されていないものの、東川町との境界からわずか300mほどの倉沼2遺跡に石器を残したのは、そんな時代を生きていた人たちだ。



幌倉沼遺跡から出土した石器＝東川町郷土館所蔵

(注4) 氷河期のこの時期は、例えばイギリスとフランスが陸続きだった。また、今はベーリング海峡で隔られているアジアとアラスカの間も歩いて移動できたとされ、北アメリカに人類が渡った要因だと考えられている。

(注5) 最終氷期のころ、北海道はサハリンと地続きだった一方、水深がある津軽海峡は海だったので本州とは切り離されていた。このため北海道は日本列島というより、ユーラシア大陸の一部になっていた。

ヒグマやキタキツネ、エゾシカなどが日本では北海道にしかいないのは、この時期マンモスなどと一緒大陸から渡ってきたものの津軽海峡にはばまれて本州まで行くことができなかったためだと考えられている。ちなみにマンモスなどは、縄文時代が始まる前後から気候が温暖化した影響で絶滅したとされる。

失われた痕跡

先述したように東川町内の埋蔵文化包蔵地はわずか23カ所だが、お隣の旭川市内には216カ所(2020年4月時点)もある。旭川には市立博物館があり、専門の学芸員や民間の郷土史家も多く、調査の積み重ねがあることが大きい。旧石器時代の遺物は倉沼2以外にも東旭川町桜岡、末広、神居町などで見つかっており、旭川には2万年あまり前からヒトがいたことが分かっている。

それだけではない。北海道教育委員会によると、東川町に隣接する旭川以外の各町でも旧石器時代の石器などは出土しており、遺跡は東神楽に1カ所、美瑛は9カ所、上川にも7カ所ある。旭川も加えた近隣5市町のうち、縄文時代より前の遺跡がないのは東川だけだ。それは、東川の地だけ旧石器時代には人がいなかったわけではなく、他市町と同じようにヒトはいたものの、たまたまその痕跡が見つかっていないだけ、と考えるのが自然ではないだろうか。

東川町の場合は特殊な事情もある。それは町内で1963年度(昭和38年度)から大規模な圃場整備が行われたことだ(注6)。同じような農業構造改善事業は各地でも行われているが、東川はその道内第1号だった。ちなみに町内のキトウシ山(標高457m)中腹にあるお城の形をした展望閣は、この事業の完了を記念して建てられた。

同事業はコメどころとしての基盤を他市町村に先駆けて固める、東川農業にとって重要な節目になった。しかし埋蔵文化財への配慮や関心が現代より格段に低かった時代のこと、道内他地域に先駆けて行われた東川町の場合、遺跡保存の観点からはかなり厳しい状況だったようだ。旭岳のふもとに位置する東川町は総面積の3分の2が山林で、平野部はけっして広くない。その狭い平野部の大半を占める農地が、ブルドーザーなど重機を使って掘り起こされたうえに客土され、長い歴史が刻み込まれていた土壌は大きく損なわれた。

さらに当時の資料や関係者の話によると、どこにも先行事例がない実験的な事業だったため農家の間には反対論も根強く、また工法が確立されていなかったため作業は遅れがちだったらしい。このため地中から多少の土器片や石器などが見つかったも、作業を中断して考古学的な調査を待つという判断はなかなか下せなかったようだ。

幌倉沼遺跡と西6号遺跡の発掘調査が行われたのも1965年(昭和40年)～68年で、ちょうど大規模圃場整備が行われていた時期に当たる。急ピッチで作業が進む中、発掘調査が行われたのはごく幸運な例外だったのかもしれない。ちなみに両遺跡とも発掘調査後は埋め戻され、畑や水田になった。出土資料は郷土館などに保存されているが、現場に立ってもかつて縄文人が住んでいた痕跡は跡形もない。

(注6)1961年(昭和36年)の農業基本法制定を受け、明治時代の入植以来無秩序に広がっていた狭小な水田や畑を全町的に掘り直し、30アールずつに区画整理し直した。総事業費は約50億円、総面積は約3千ヘクタールで、1974年度(昭和49年度)に完了した。



大規模圃場整備事業を記念して1975年(昭和50年)10月に完成した展望閣

旭岳誕生!

氷河期のある日、今の東川がある地の東にそびえる大きな山が激しく火を噴き始めた。大雪山だ。今から2万～1万5千年ほど前と推測される。この時代は大雪山を構成する山々のうち黒岳(1,984m)、小泉岳(2,158m)、赤岳(2,078m)などは形成されていたが、旭岳(2,291m)や北海岳(2,149m)などはまだ存在していなかった。

のちに北海道最高峰となる旭岳を生み出す噴火活動が、ついにこのころから始まったのだ。この時すでに旭川など上川地方や、大雪山を挟んで反対側に当たる十勝地方には人が住み着いていたので、当時の旧石器時代人たちは激しい噴火を目の当たりにし、右往左往したのではないかと。

これに先立つ今から3万年ほど前、大雪山ではきわめて大きな爆発的噴火があった。「お鉢平中央火山大爆発」などと呼ばれる噴火で、北東方向に流れ出た火砕流は150～200mほどの厚さに堆積した。それが長い時間をかけて石狩川や忠別川が削り取った跡が、今の層雲峡や天人峡でみられる柱状節理だ。噴火は繰り返され、西側に流れ出た火砕流は旭川など上川盆地にも到達したとされる。

旭岳を形成することになった2万～1万5千年前からの噴火活動は、3万年前の大爆発後、カルデラ状になっていたお鉢平の西側で始まった。火口から噴出した溶岩流や火砕流などが積み重なって山体が少しずつ高くなり、何千年もかけて新たな山々ができた。歴史は旧石器時代から縄文時代へと移っていった。東川町のシンボルでもある旭岳は、大雪山系で最も新しく誕生した火山だ。



旭岳は大雪山系で最も新しく誕生した活火山。中腹には「地獄谷」と呼ばれる噴気孔群があり、活発な噴気活動が続いている

謎の遺跡

氷河期は寒冷で低木や草しか生えていなかったが、大きな噴火があると火砕流や大量の降灰で草すらも枯れてしまい、動物も人間も移動を余儀なくされた。しかし噴火が一段落し、何十年、何百年もたって植生が回復して河川や湧き水の水質も安定すると、再び人々は戻って来た。

農耕が始まる以前の旧石器時代に定住という考え方は乏しく、人々は獲物や住みやすい場所を求めて移住を繰り返していたと考えられている。旭川や東神楽、美瑛、上川の地

に石器などを残した人たちも、噴火など自然条件の変化に応じて住む場所を柔軟に変えていたのだろう。移動が繰り返される中で、今の東川の地に立ち寄った人たちも少なくなかったのではないかな。

大昔の人たちが広範囲に移動していた痕跡が、やはり東川町内ではなく、そのすぐそばに眠っている。旭山動物園に代わって今度ははるか大雪山の山の上。旭岳山頂の東側に引かれた東川町との市町村境界線より、やや上川町側に入った標高2,120mほどの高地だ。ここに日本で最も高い場所にある遺跡としても知られる「白雲岳遺跡」がある



小泉岳 (2,158m) 付近から見た白雲岳 (2,230m)。山頂のやや下にある白雲岳遺跡は日本で最も高い場所にある遺跡だ

白雲岳遺跡は謎めいた遺跡で、旭岳の東側に連なる小泉岳(2,158m)と白雲岳(2,230m)の間の南斜面にある。初めて遺物が見つかったのは1924年(大正13年)と古い。「大昔の人が標高2千メートルを超える高地帯で何をしていたのか」との関心から何度も調査が行われ、石器などが大量に見つかっている。

これまでに分かっている範囲では幌倉沼遺跡と同じ時代に当たる縄文時代晩期の石器が多く、石器の材料である黒曜石の産地は多くが白滝(現在のオホーツク管内遠軽町白滝)産で、次いで置戸(オホーツク管内置戸町)産だった。十勝産や近文台(旭川市)産もわずかながらあった。

これらのことから白雲岳遺跡に石器を遺した縄文人は、主に白滝、置戸といったオホーツク地方の住民で、旭川など上川地方や十勝地方の住民たちもごく少数だが訪れていたと考えられている。遺跡の近くには清水が流れる沢があり、縄文人が夏場に狩猟をした際の基地のような場所だったとも推測されているが、はっきりした理由は解明されていない。



白雲岳遺跡で採集された遺物＝上川町教育委員会提供

黒曜石の道

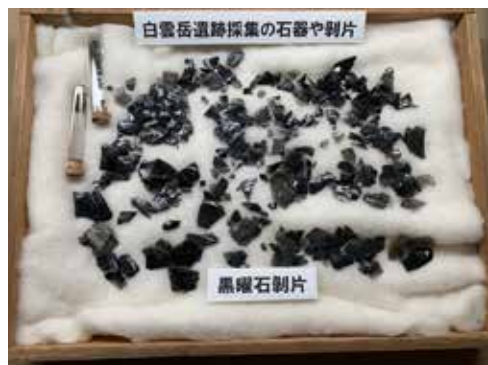
旧石器時代から縄文時代にかけて、石器は暮らしを左右する大切な道具だった。その材料として最も使われたのは黒曜石で、道内では白滝を筆頭に置戸、十勝三股(十勝管内上士幌町)、赤井川(後志管内赤井川村)が4大産地とされる。これらの大産地では原石を石器に加工する優秀な職人集団も形成された。

特に、国内でも有数の産地である白滝産の石器は当時の最高のブランド品だったように、道内各地のほか、縄文時代に大集落が形成された青森市の三内丸山遺跡さんないまるやまなど東北地方や、氷河期に陸続きだったロシア・サハリン州南部にある旧石器時代の遺跡などからも見つかっている。

こうしたことから先史時代には、産地と消費地を結ぶ「黒曜石の道」ともいべき石器の流通ルートが、各方面に形成されていたのではないかと考える専門家もいる。そしてその一つが、主産地であるオホーツク地方や十勝地方と、消費地である上川盆地など他の地方とを最短距離で結ぶ、大雪山系越えのルートだった可能性がある。

旭岳は2万～1万5千年ほど前に始まった大噴火がいったん治まった後、縄文時代晩期に当たる今から3千年～2千年前にも山頂から西側が大きく崩落する大きな水蒸気爆発を起こしている。こうした大噴火のたびに山の木々が焼け、獲物の動物はいなくなり、山越えのルートも通行不能になったかもしれない。

ただ大雪山系の山々では、白雲岳遺跡以外にも各所で少量ながら石器などが見つかり、おそらく夏場を中心に縄文人らはかなり広範囲に高地帯を移動していたようだ。大雪山系では今のところ縄文時代より前の遺物は見つかっていないが、白滝などでは2万数千年前から石器が生産され、サハリンなど広範囲に流通していた。大雪山系は国立公園内でもあるため調査の難しい場所だが、縄文時代より前の旧石器時代から人々が山越えをしていた可能性もある。



白雲岳遺跡で見つかった黒曜石。はるか昔の「黒曜石の道」を通じて運ばれてきた可能性もある

旭岳とともに

ここまで、旭山動物園のそばにある倉沼2遺跡や、標高2千メートルを超える高地にある白雲岳遺跡を紹介してきた。東川町の周辺に点在するこれらの遺跡が示唆するのは、現代の私たちが想像する以上に大昔の人々は広範囲に移動し、そしておそらくは旭岳が誕生す

る前の旧石器時代から人々は東川町があるこの地を縦横に移動していただろう、ということだ。

長い年月の間には大きな噴火があったり、寒くなったり暖かくなったりもした。住環境が悪くなればこの地から人が去り、よくなればまた人が集まってきたのではないか。

旧石器時代から縄文時代にかけて旭岳が北海道最高峰の高さまで「成長」したことは、現代の東川町にとっても大きな意味がある。旭岳が何千年もかけて2,291mの高さになっていく過程で、ふもとは次第に扇状地が形成されていった。この扇状地の上に位置するのが東川町だ。

噴火がおさまって木々が生い茂るようになると、この地は豊かな地下水や森林資源に恵まれ、さらには景観にも優れているという、今につながる自然条件が次第に整うようになった。「写真映りのよい町」を目指し、「東川らしさ」を主軸にする現代のまちづくりも、こうした自然条件を抜きには考えられない。

それは扇状地の端に当たる旭川も同じことで、東川も含む旭川周辺では、旭岳が現在とほぼ同じ形状になった3千年～2千年前の縄文時代晩期から急に遺跡の数が大きく増える。縄文時代半ばから再び始まった比較的寒冷な時期が終わり、人口が増加し始める時期とも合致するが、旭岳が今のような姿になっていく過程で、東川や旭川の地がどんどん住みやすい場所に変化していったことをうかがわせる。

「北海道は歴史が浅い」といわれるが、実は和人が定住して以降の歴史が短いだけで、はるか昔からこの地には人が住み、その人たちがいなくなってもバトンをつなぐように次の人たちが暮らしてきた長い歴史があるのだ。



北海道最高峰の2,291mまで「成長」した旭岳（右端のピーク）。ふもとの東川町に豊かな実りと美しい景観をもたらしている

アイヌ民族の時代

東川町内では縄文時代から続く続縄文時代、^{ぞく}擦文時代より後の遺物はほとんど見つかっていないため、幌倉沼遺跡などに住んでいた縄文人たちがその後もこの地に定住していたのかどうかは分からない。だが時代が中世から近世に入ると、現在の旭川市を中心とした石狩川流域などには、この国の先住民族で縄文人との遺伝的なつながりも指摘されるアイヌ民族が多数定住していた。

縄文人が何かの理由でこの地を去った後に別の場所からアイヌの人々が入ってきたのか、あるいは縄文人が長い年月をかけて文化的に変容しアイヌ民族へと変わっていったの

かは分かっていない。ただ、早い時期に東川町へ入植した人たちからの過去の聞き取りなどによると、明治年間に入植した当時は町内の河川沿いにもごく少数ながらアイヌの人々が定住していたという。(注7)

アイヌ民族は大雪山系の山々を「カムイミンタラ(『神々の遊ぶ庭』の意味。『高位の神である)ヒグマが多い場所』などとする解釈もある)」などと呼んで恐れ敬い、狩猟や祭りなどの場にしてきた。このためいつからかは不明だが、和人が入植する明治時代半ばまでの長い間、今の東川町域を含めた一帯はアイヌ民族の支配下にあり、アイヌの人々が自由に往来していたと考えられる。

(注7) 郷土史「ふるさと東川」(1994年刊)の第1巻創生編330ページには、古老による入植当時の思い出話として「(開拓地に入ったころは)東5号の忠別川沿いに1戸と西3号倉沼川沿いに1戸、また野花南の川沿いに1戸、アイヌの人たちの住居があった」などと記されている。旭川で見られたような何家族も居住する大きな集落は、東川には形成されなかったらしい。



山開きに合わせて毎年6月、旭岳温泉で行われている「旭岳山のまつり」。山の神に祈るヌプリコロカムイノミが祭りのメインだ

和人の時代

いわゆる「入植」として和人がこの地に移住してきたのは、日清戦争が終結した1895年(明治28年)からだ。明治政府や北海道庁による北海道への殖民計画に沿って同年4月、当地(当時の名称は旭川村字忠別原野ちゅうべつげんや)を入植地として貸し付ける制度が始まった。これを機に、香川、富山、愛知、徳島、愛媛、兵庫など本州、四国、九州の各県から続々と移住者が集まった。この年の人口は472人、旭川村から分離してこの地が東川村と呼ばれるようになった2年後の1897年(明治30年)には人口が1770人に増え(注8)、当地の多数者はアイヌ民族から入植者たちへと代わっていった。

(注8) 明治時代から現代まで長期の人口の変遷は「コーヒーブレイク東川人口ものがたり」で論じた。

ちょうどこのころは、本州などから北海道への移民が爆発的に増えていた時期だ。東川への入植が始まったのとほぼ同時期、1897年(明治30年)の道内主要都市の人口は、最大都市だった函館が約8万人、札幌が約3万人、旭川は約8千人だった。

函館は、米ペリー提督による幕末の黒船来航で伊豆半島の下田と並び開港するなど、日本で最も早い時期に鎖国を解かれた国際港湾都市として栄えていた。開拓使が置かれた札幌は行政の中心として成長を始めており、のちの1940年(昭和15年)に函館を抜き文字通りの道都になった。旭川は日露戦争を前にした1901年(明治34年)に旧陸軍第7師団が札幌から移駐して以降、急速に人口が拡大していく。

農地の開墾が急速に進んだ東川村にも人が集まり、初の国勢調査が行われた1920年(大正9年)の人口は8009人。これは2018年末時点と同じくらいの水準で、入植開始から56年後の1951年(昭和26年)には1万人を超えた。59年(昭和34年)には町制が施行されて東川町となった。



町制施行を記念して西4号市街地で行われた騎馬行進
=1959年（昭和34年）11月5日

バトンをつなぐ

近代の開拓期、東川にはさまざまな才能や志、能力を持った人々が本州などから移り住み、原生林の開墾や厳しい冬、相次ぐ凶作など困難を一つずつ克服しながら、新たな故郷を築き上げた。本稿執筆の2021年（令和3年）時点では入植が始まって126年が経過し、明治の移住者の子孫たちはすでに定住者として代を重ねるが、この地に新たな人材を迎え入れ、歓迎しようとする姿勢は現代の町民にも脈々と受け継がれている。むしろ今は日本国内だけではなく、世界中から多様な人々がこの地に集まり、この地で平和に交流することを目指している。

想像を膨らませてみたい。有史以来の当地の歴史は、確認されているだけでも縄文人の時代、アイヌ民族の時代、そして今に連なる和人の時代へと移り変わってきた。先述したように縄文時代のさらに前の氷河期、旧石器時代にも人がいたとすれば、東川の地には1万年以上も前からさまざまな文化を持つ多様な民族が現れては消え、または往来していたことになる。

最後に、冒頭で記した言葉をもう一度繰り返してから本稿を閉じることにしたい。やはり東川町は「移住者のまち」なのだ。